

【暗証聖句】

「十分の一の献げ物をすべて倉に運び、わたしの家に食物があるようにせよ。これによって、わたしを試してみよと万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであろう。」マラキ3:10

【日・什一は十分の一】

収入の十分の一は、聖なる神様のものですので、他の献金とは別に、それを神様にお返しすることが求められています。什一が最初に出てくるのは、創世記14章18節～20節にかけてです。いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクがアブラハムを祝福すると、アブラハムはすべての物の十分の一を彼に贈ったことが記録されています。また、創世記28章20～22節にかけて、エサウから逃げてきたヤコブが、ハランで天と地をつなぐ階段の上を天使が上り下りしている夢を見たとき、「無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます」と誓いを立てています。このように什一は、シナイで初めて始まった制度ではないことがわかります。それと共に、ヘブライ7章1～9節を見ると、アブラハムがメルキゼデクに十分の一の贈り物をした際、メルキデザクはレビ族ではなく、メルキデゼクが象徴しているイエス・キリストもレビ族ではない。そしてアブラハムの子孫からやがてレビ族が出てくることを考えると、レビ族がアブラハムを通して什一をささげたとと言えることから、什一はレビ族のための特別な制度ではないとも教えています。

【月・倉はどこにあるのか】

マラキ 3:10 で、「十分の一の献げ物をすべて倉に運び、わたしの家に食物があるようにせよ」と命じられていますが、「倉」「私の家」とはどこのことでしょうか。神の民は、神の家とは、第一義的には聖所(幕屋)と理解していました。最初はシロにあり、次にエルサレムの神殿の中に聖所が設けられました。また、申命記 12 章 5、6 節では、「必ず、あなたたちの神、主がその名を置くために全部族の中から選ばれる場所、すなわち主の住まいを尋ね、そこへ行きなさい焼き尽くす献げ物、いけにえ、十分の一の献げ物、収穫物の献納物、満願の献げ物、随意の献げ物、牛や羊の初子などをそこに携えて行き」なさいと命じられています。イスラエルは、過越祭・五旬節・除酵祭の年に三回、什一とささげものを携えてエルサレムを訪れ、神を賛美し礼拝しました。そのささげられたものは、イスラエル中の宗教に携わるレビ人に分配されました。教会では、この聖書の中央の倉の原則と調和させ、世界教会を代表する倉として教区・教団を組織し、そこに信徒によってささげられた什一や献金を集め、広く宣教のために用いられていきます。

【火・什一の目的】

「土地から取れる収穫量の十分の一は、穀物であれ、果実であれ、主のものである。それは聖なるもので主に属す」(レビ記 27 章 30 節)とあるように、什一は神様のものです。ですから、什一の使用目的は、神様のためのものではければなりません。具体的に、旧約時代はどうだったかという、民数記 18 章 21 節に、「見よ、わたしは、イスラエルでささげられるすべての十分の一をレビの子らの嗣業として与える。これは、彼らが臨在の幕屋の作業をする報酬である」と、什一はレビ人の嗣業として与えられると書かれてあります。他の 11 部族は皆、嗣業つまり神様が下さるものとして、カナンにおける土地がそれぞれに与えられていきました。しかし、レビ人にはそれがありませんでした。その代わりに什一が与えられたのです。それと共に、レビ人は幕屋の作業に従事し、一般的な収入を得ることの出来る仕事をする事ができませんでした。そのため、神様はレビ人の幕屋での奉仕の報酬として什一を定めました。これにより、レビ人は幕屋での奉仕に専念する事ができたわけです。

逆に、什一をささげる側にたつたとき、それは神様の働きの一翼を担うこととなります。また、什一を通して神様への信仰を強めていくことができます。神様は什一を通して、神様が私たちの生活を支えてくださるかどうか試してみよと言われました。什一をささげたら、生活ができなくなってしまうのではと不安を感じる人もいることでしょう。しかし、多くの忠実なクリスチャンたちは人生を振り返ったとき、不思議と生活が支えられてきたことを実感するものです。そして、そのことに対して、神様に感謝する気持ちでいっぱいになります。什一と諸献金を通して、私たちは神様との関係をより一層強くしていくことができます。

また、使徒言行録 20 章 35 節に「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました」とあるように、主が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を実践することができます。

【水・什一を総収入から、あるいは実質収入からささげるのか】

牧師一年目のときでしたが、元婦人伝道師をされていた方の什一のささげ方に驚いたことがありました。年金などの収入の什一はもちろんのこと、何か物を買ったら、その物のだいたいの値段を考えて、その十分の一もささげておられました。また、ある貧しい学生が、授業料に相当する奨学金をもらっていたのですが、奨学金をもらうと、そこから十分の一をささげるために授業料が

いつも足りなくなり、その分をアルバイトで稼がなければなりません。そこまでしなくても良いのでは、という思う人もいることでしょう。ただ、彼らは人はともなくも、自分はそうしたい、そうすべきだと考えて、ささげていたわけです。そこに、彼らと神様との強い関係を見ることができます。

また教団の機関で働いている人のように、毎月の給料から什一が天引きされている人もいれば、農家のように一年に一度の収穫があった月にまとめて什一をささげる人もいます。それぞれの什一の形があります。ところで、什一は税金も含めた総収入の中からささげるのか、それとも税引き後の実質収入からが良いのかと悩む場合があるかもしれません。統計では、前者を選択している人が多いようです。教会への証第四巻 469 頁で、エレン・G・ホワイトは「誰もがみな自分自身が査定官であり、自分の心の中の目的に従って与えるように委ねられています」と述べていますが、各自、神様との間において考え、信仰によってささげていくことが大切なのです。

列王記上 17 章に、雨が降らず飢饉が起こり、貧しさのあまり、子供と一緒に死ぬほかにないと考えていたサレプタのやもめが、自分たちのためにとっておいた最後の食事をエリヤに与えたお話が出てきます。いったいどのような思いで、それを与えたのでしょうか。小さな子どもは、どのような思いでエリヤを見つめていたのでしょうか。しかし、神の預言者エリヤは彼らにこう言ったのです。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで、壺の粉は尽きることなく瓶の油はなくなる。」(列王記上 17:13, 14)

信仰が試されていたことが分かります。最後の大切な食べ物を与えた何も無くなってしまったあと、そこから本当の神の力が表されるのです。エリヤが語った通り、やもめの家の粉も油も尽きることがなかったのです。私たちがささげるときも同様に、主の祝福があることを信じ、信仰でささげていくことです。

18世紀に活躍した人物で、リーズ・ハウエルズという伝道者がいます。彼は、助けを求めてくる人に、いつも惜しみなく与える人でした。その彼の優しい姿を見て、町の人々は彼を信頼し、伝道が進んでいきました。そんなある日のことでした。彼にアフリカで伝道するようにと要請が来るのです。彼はこれを主からの導きと受け止め了解します。そこで彼は、急遽渡航費用やその他で多くのお金が必要になりました。しかし、事情を知らない物ごいが、いつものようにお金をもらいにやってきました。彼は迷いました。これでは自分の渡航費がなくなってしまう。ところが、心の中に「すべてを与えなさい。そして、私だけに頼りなさい」と語られる主の声が響きます。彼は結局、出発の前日まで、自分のものを与えつくし、ついに渡航費がなくなってしまうのです。

お別れの日、駅まで大勢の人々が見送りに来てくれました。しかし、誰一人として、彼に渡航費がないことを知っている者はありませんでした。彼はチケットを買うために、列に並びました。自分の番が近づくにつれ、心臓が高鳴りました。そして、ついに最後の一人になったときでした。ひとりの紳士が近づき「先生、私はこれから仕事で、最後まで見送ることができません。これは餞別です」と、多額のお金を手渡したのです。その額は、なんとまさに彼が渡航費用として必要としていた額でした。

【木・正直なまたは忠実な什一】

コリントの信徒への手紙一 4 章 1、2 節

「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。」

私たちは神様の秘められた計画をゆだねられた管理者であり、管理者に求められることは忠実さであることが教えられています。什一も、忠実さが何よりも求められることです。ささげる側の忠実さはもちろんのこと、それを使用する側にも正しく用いる忠実さが求められます。私たちが忠実であるとき、やがて主が戻って来られた時、『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』(マタイ 25:21)と言われることでしょう。エレン・G・ホワイトは次のように教えています。

「十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい」とは、神のご命令である。それは感謝の念や物惜しみしない心に訴えられているのではない。これは単純な正直さの問題である。十分の一は神のもので、神はご自身のものを神に返すようにと命じておられるのである。」

これからも、神様との正直な関係を築いていく者でありたいと願います。